

内村鑑三における東西宗教思想

関 岡 一 成

一

この小論のテーマは、厳密には「内村鑑三におけるキリスト教と日本の諸宗教思想」とも言うべきものであることを初めにお断りしておきたい。筆者は、従来より「キリスト教（プロテスタント）思想と日本の諸宗教思想」の比較研究を志し、ここ十年來種々の試行錯誤の研究を経て今日に至っている。それゆえにこの小論は内村研究に中心があるのでなく、内村という人物を通して、キリスト教思想と日本の宗教思想がどのように出会ったかを見るのに中心点がある。

ところが、これは内村だけでなく明治の代表的なキリスト者すべてにあてはまることであるが、彼らが信じたキリスト教を体系的に整理し、つまり思想とし、それと日本の宗教思想が比較され

るということがほとんど為されていない。比較的それに近いものとして、植村正久の「真理一斑」が挙げられるが、それ以外にはほとんど無いと言つてよい。

内村の場合も、彼の信じたキリスト教と、日本の諸宗教思想との対比ということがアポロゲティックな意味で為されていないので、厳密には「キリスト教と日本の諸宗教思想の比較研究」という観点から彼を見ても、明確な答えが得られるかどうか疑問のあるところである。

ただ、筆者が「キリスト教と日本の諸宗教思想」の比較研究の一環として内村を取り上げたのは、伝統的な日本の文化・宗教思想に育まれた彼が、新しい西洋のキリスト教思想を自分の生死をかけるものとして受け入れたということ。そこに彼なりにキリスト教思想の何であるか、日本の宗教思想と何処が違ふかを考えて

決断を下していると思うからである。

もう一つ、具体的内容に入る前に断っておきたいことは、筆者が今、「キリスト教思想と日本の諸宗教思想」の比較研究で見極めたいと思っていることは、キリスト教と、仏教なら仏教、神道なら神道との比較の結果、そこに相違点があるのかないのかということである。つまり、類似点よりも相違点を明確にしたいという願いを持っているということである。

それゆえに、この小論においては、内村がどのような思想に「キリスト教と日本の諸宗教」の相違の原点を見ていたかを考察したい。言うまでもなく、内村はキリスト者であったので、彼はその相違点に優劣の観点を加えているが、この小論では優劣でなくどこまでも相違点として考えてゆきたい。

二

内村はその生涯を通じて、ヨーロッパやアメリカのキリスト教とは異なった日本独自のキリスト教の確立を目指して生きたと言える。彼は、日本の風土・歴史が産んだ日本の文化を否定せず、それらの美しいものとキリスト教の精髓とを結びつけようとしたそのことは、彼が度々強調した武士道とキリスト教との結合ということにも見られる。¹⁾ それゆえに彼は、明治以来今日迄、キリスト教を受容した人々の間に時として顕著に見られる唯一神信仰イコール不寛容ということで、日本の諸宗教を異教・偶像崇拜とし

て排斥し、日本の伝統的文化を拒否する狭い立場のキリスト教には立たなかった。英文で書かれた著「代表的日本人」の中で五人の日本を代表する人物の一人に日蓮上人を取りあげているのもその立場の現われであるし、また、アメリカより帰国して仮教頭兼校長事務取扱いとして、赴任したミッションスクール（新潟北越学園）で、新たな教科として論語と仏教の講義を設けたのもその現われである。また、日常生活の中でも彼の家のお手伝いの女性が、迷信的な方法で彼の為に祈るのを非難もせず暖かく見守っていたのもその現われと言えよう。²⁾

では、内村は、日本的キリスト教という立場で、日本の文化、宗教とキリスト教との間に完全な調和・結合を考えていたかというところではない。彼はあくまでも、キリスト教はキリスト教であり、日本の文化・宗教とは相違する点があると見ていた。彼は英文の自伝「余は如何にして基督信徒となりし乎」の最後の章において、次のように言っている。「余は基督教が他の諸宗教にまったく関係のないものでないことを知っている。それは『十大宗教』の一つである、そして我々はある人々のように、他の一切を貶してそれをもつ価値のある唯一の宗教と見せることはしないである。しかし余にはそれは余の親しく知っているいかなる宗教よりもすぐれている。はるかにすぐれている。すくなくとも余の育てられた宗教よりはより完全である。そしていま『比較宗教学』について講義されてきたことをすべて精査して後にも、余は未だ

それ以上に完全なものを考えることはできない⁽⁵⁾」と。

これは彼の著書の中では最も若い時代(三二歳)に書かれたものの一つであるが、ここで述べられているキリスト教と他宗教に対する彼の考えは、後年もほとんど変らなかつたと見てよいであろう。では次に、どういう点にキリスト教が他の諸宗教と比較してより完全であると言ひ得る根拠があると見ていたかということになる。この点について彼は、日本人がキリスト教を必要とするのは、「我々は我々の悪をより悪として現し、我々の善をより善として現すためにそれを必要とするのである。そのみが我々に罪を悟らせることができる、そして我々にそれを悟らせて、我々を助けてそれ以上にのぼらせ、それを征服させることができる⁽⁶⁾」からであると語り、また、他の所では、「……すべての一般的な道徳は我が国にもある。これは余の父また母、また祖先より学んだ⁽⁷⁾。然しながら罪の問題については、これをはじめてイエスに学んだ⁽⁸⁾」と言っている。つまり、罪を教え、その罪からの解放を教える、この点にこそキリスト教の真髓があり、日本の他の諸宗教と相違する点があると見たのである。そして、彼はこの「罪からの救い」ということを身をもって体験するのには、受洗後八年という年月を経なければならなかつた。

三

では、内村がキリスト教の真髓、日本の宗教にはない独自の思

想として把握した「罪からの救い」ということはどういうものであったのか。また、そもそも彼にとって罪とは何であり、罪人とはどういうことであつたのか。こういった問いに対する解答は、全て受洗後八年にして到達した贖罪信仰の一点に凝縮した形で存在していると言つてよいであらう。つまり、罪の深みの極みに開かれたのが罪からの解放という場であるので、彼の罪理解の頂点は、罪の赦しを受け入れたアメリカ留学中の第二の回心の時点で現われていると言へる。それゆえに彼の到達した贖罪信仰の一点を見つめることにより、彼の理解した罪の何であるかが理解出来るわけであるが、ここではその一点をよりよく理解する為に、第一の回心である受洗前後から、第二の回心である贖罪信仰に到るプロセスを追つてみることにしたい。

(1)内村が世俗の、また日本文化の中に存在した罪認識と訣別して、キリスト教独自の罪理解への一步を記したのは、札幌農学校に入学して数か月後に先輩たちの半強制的な勧めによって「イエスを信ずる者の契約」に署名した所から具体的には始まつたと見てよいであらう。この契約はクランクによって起草されたものであり、その内容には福音的なものはもちろん存在したが、彼らが主にその中からくみ取つたものは、律法的・倫理的な内容の方であつた。そして、この理解は契約署名後半年に受洗してからも変らなかつた。彼らは、キリスト教に接し、受容して初めて、唯一神、律法というものを知り、罪の何であるか、罪の憎むべきこと、

その恐るべきことを知った。⁽¹¹⁾そこで、彼らが洗礼を受けて新しい人間となったと感じて決心したことは、間もなく入学してくる異教徒の一年生に対して、二年生であるキリスト者は品行と学業において模範であるべきである、⁽¹²⁾ということであり、内村自身の場合には、「余は今より全く余の言行を改むべし。余は再び決して虚言を吐かざるべし。余は決して他人を批評し他人を悪口せざるべし。余は情欲を慎むべし。余は懶惰ならざるべし。余は徳をもって恨みに報ゆるべし。余は功名心を根より断つべし。余は謙遜なるべし。余は酒も煙草も芝居も廃すべし。余はおごらざるべし。余は日曜日を清く守るべし」と。余は実に全般的に改革を宣言せり。しかししてひとり心に決するをもつて足れりとせず、余の友人に向かつて余の決心を宣告し、⁽¹³⁾天地に誓い、会衆に約し、完全無欠の生涯を送らんことを断決たり」という決心となつて現われた。彼がこのような律法を己に課し、それを道徳・倫理の基準として生きようとした時、鎮守の神の祭礼日と安息日とが重なる心を乱され、また二年ぶりに札幌から東京の自宅に帰つて、喜ぶ両親が仏壇に無事到着を感謝してお供えがされるのを見て苦痛を感じるといふことになる。そしてそのような外的なものとの対立といふこと以上に深刻な問題になったのは、先の受洗の際の決心が「この製造的の聖潔は長くは続かざりき」という形で三か月を経ないで挫折したという経験である。そしてこの経験が彼をしてさらに深いキリスト教理解・罪理解へと成長させることになる。彼

の札幌農学校での四年間は、キリスト教を律法的・倫理的に理解した時であり、しかもその破れを体験した時であると言える。

(2)内村は卒業後、官吏となり、一社会人として働き、その間には教会形成にも積極的にかかわったりするが、学生時代に味わったキリスト教の目指す聖潔と、それとはかけ離れた現実の自分の姿、というギャップに益々悩まされることになる。外面的には、安息日を忠実に守ったり、社会人として最も大きな試練の一つである禁酒ということも「基督教の信仰告白の一部」⁽¹⁴⁾として頑固に守り得ても、内面に生じた罪の意識はどうしようもないほどに広がっていく。しかも、それは聖書を学べば学ぶほど深刻なものになっていった。「余は偽善者なり。人を殺す者なり。姦淫を犯す者なり。盗人なり。しかしして聖書なる電灯をもつてなおも余の心中を探るならば、余は神を汚す者ならん——ああ聖書の言をして誤謬ならしめよ。余はかくのごとき光輝に堪うるあたわざるなり」⁽¹⁵⁾。そしてこの苦痛は、最初の結婚に失敗するということによつてさらに決定的なものとなつてしまふ。「自分は罪からまぬがれない者で、キリストの教えを実行できない。クリスチャンの資格がないものだ」とか、「罪に責められて、余は全く生涯の快楽を失えり。食事進まず、夜眠は妨げられ、事をなす気力なく、ただ恐怖をもつてふるえながら日を送りたり」という状態になり、彼はそれから何とか脱れようとして、当時流行のリバイバル運動に身を委ねようとしたり、種々の試みをするが彼の心に平安を与

える事は出来ず、遂に罪の問題を解決する為にアメリカに渡ることになる。この時期の罪観の特徴は、最初の罪理解が、倫理・道德的な観点から主に捉えられて、表面的、外面的であったのに対して、罪が一段と内面化され霊肉の葛藤として理解された点にあると言える。

(3)内村がアメリカに渡って先ず為したことはエルウィン児童白痴院の看護人として働くということであつた。⁽²¹⁾生活していく為に働く必要はあつたが、特にそのような場で働くことにした何よりの理由は渡米の最大の目的であつた罪の問題の解決ということに あつた。「余が病院勤務に入つたのはマルティン・ルーテルをエルフルト僧院に逐²²いやつたとやや同じ目的をもつてであつた、ということである。余がこの歩みを取つたのは、世界がその方面に余の奉仕を必要とすると考えたためではない。いわんや(たとえ貧しくとも)余はそれを職業として求めたためではない。ただ余はそれを『来るべき怒り』からの唯一の避難所であると考え、そこで余の肉を服従させ、内的純潔の状態に到達するように自身を訓練し、かくして天国を嗣²³ごうとしたためである」。⁽²⁶⁾彼はこの時、肉と霊との争いに罪の姿を見、また霊と肉との争いは利己主義、私欲を源泉としていたと考えた。それゆえに、私欲を離れることが結局罪から解放されることになると考へて、最も己れを空しくして働かなければ動まらない働き場である精神病院の看護人を選んだのである。彼がその後八か月間、武士の子であるというブラ

イドも全てのものをかくなり捨てて、いかに己れを空しくして働いたかは「流竄録」などにもその一端が記されている。しかし、結果的には、子供たちに大きな感化を与えて、立派にその職務は果したものの、一番肝心の罪の問題、私欲から離れるということ は解決出来ないままであつた。彼がこの病院勤務を通じて明確にし得たことは、「慈善は善人を造るものにあらずなり。慈善は愛心の結果にして、その原因にあらず」ということであり、彼が罪の源泉と見、そこからの解放を目指した利己主義・私欲ということも、「慈善事業に携わることによって私欲をなくしたい」という利己主義・私欲がある限り、どれだけ努力しても無駄であるということであつた。「利己主義はいかなる形で現れても悪魔のものであり罪であることを、余は幾多の苦しい経験によつて学ぶにいたつた」⁽²⁵⁾とか、「慈善、『愛人』事業は、余の『愛己』的傾向が余の中に全く絶滅せられるまでは余自身のものでないことを余は知つたのである」⁽²⁶⁾と言われるにいたる。ここに到つて彼はそれ以上一刻も病院に留ることに耐えられなくなり、新たな視点から罪の問題を解決するために、次に大学に移ることになる。この時期の罪理解の特徴は、「私欲を離れたいという私欲」にこそ正に彼が解放されたいと願っている罪の原点があることに気がついたことであろう。

(4)内村は精神病院を辞して後、アーマスト大学で二年間にわたつて勉強したのであるが、このアーマスト大学で、過去八年余悩

みつづけた罪の問題の解決を得る。「三月八日 余ノ生涯ニ於ケル甚ダ重大ナル日ナリキ。『キリスト』ノ贖罪ノ力ハ今日ノ如ク明瞭ニ余ニ啓示セラレシコト當テアラザリキ。神ノ子ガ十字架ニ釘ケラレ給ヒシ事ノ中ニ、今日マデ余ノ心ヲ苦シメシ凡テノ難問ノ解決ハ存スルナリ。『キリスト』ハ余ノ凡テノ負債ヲ支払ヒ給ヒテ、余ヲ墮落以前ノ最初ノ人ノ清淨ト潔白トニ返シ給ヒ得ルナリ」彼がアーマスト大学で総長シリーズの強い感化によって到達したこの贖罪信仰は、言うまでもなく、彼が一六歳の時に署名した「イエスを信ずる者の契約」に明記されていたものであり、受洗に際して告白した信仰内容に含まれていたものであった。しかし彼はそれをこの時迄は、知識として頭で知っていたに過ぎず、自分の血肉とはしていなかったのである。彼が贖罪信仰を真実に己がものとする為には、「種々のばからしき経験と失敗の後、天賦の体力と脳力とを、ものにもあらぬもののために消費」しなければならなかった。彼は八年間にわたって意識的・無意識的に己れの知恵、力に依り頼んで罪からの救いを達成しようとしていたが、実はその点にこそ罪の根源があるということを教えられ、己れを全く空しくしてキリストによる贖罪信仰をただ受け入れるところに罪からの救いは成立すると理解した。しかもその信仰すらも神からの賜物として受け入れる以外に救いへの道はないと己れの無力さを知らされた。「キリストにおける信仰は余を罪より救うものなり。されども信仰もまた神のたまものなり（エペソ書二

・八）。余は信じて救われるのみならず、また信ぜしめられて救われる者なり。ここにおいてか余は全く自身を救うの力なき者なるを悟れり。さらば余は何をなさんか。余は余の信仰をも神より求むるのみ」と。

内村の救いはこのアーマスト大学時代に確立した。「余はそこに重い心をいだいて入った、そして余の主なる救済主にある勝利の誇りをもってそこを去った。その時ிரை余はなお多くを学びなお多くを知った、しかしただ余のカレッチの古典的な丘の上で知ったことを確認するにすぎなかった。余はそこで、故国で洗礼を受けてから約十年の後に、本当に回心させられた。すなわち向きかえさせられた、のであると信ずる。……もちろん完全な征服は生涯にわたる事業である。しかし余は自分自身を征服するにもはや余の空しい努力に頼らず、そのためには宇宙の大能力に訴えるにいたるまでに、立て直されたのである」これは三二歳の時に記された言葉であるが、この基本は死にいたる迄変らなかったと言ってよい。この時に内村は、罪からの救いを達成したのである。この罪からの救いが達成された時に、彼がそれまで、罪として問題にし、悩んで来たものの正体が明らかとなった。罪とは以前彼が考えたように、盗むとか、殺すとか、姦淫する（たとえそれが心の中であつても）ということでなく、神から離れる、神を神として認めないということにこそ罪の源泉があるということであり、盗む、殺す、姦淫するということは、神を離れた結果として

生じるもので、罪そのものではないということであつた。⁽³²⁾

四

内村は、神を神と認めないところに罪の源泉を見、神を神として受け入れるところに罪からの救いを見たのであるが、ここでもう少し内村が受け入れた神というものがどのようなものであつたかを見ることにしたい。彼が受け入れた神は抽象的な概念とか法則としての神でなく、人間を一個の人格として自覚させずにはおかない人格神としてのそれであつた。そしてそれは、天地宇宙の創造者としての唯一絶対の神であるということと同時に、もっと具体的に、旧約聖書に展開された義の神であり、新約聖書に現われた愛の神としての人格神である。内村の把握した神の姿を多方面から取り上げることは可能であらうが、最も根本的なものとして彼が理解したのは、この神は「義にして愛である」ということである。彼は好んで自分のキリスト教を十字架教と呼び、イエスは義と愛とが交又する十字の真中で贖罪を行ったと説いているのもその間のことを言つたものであらう。日本人は、一般に宗教・神というものをヒューマニスティックに、また審美的に理解する傾向があるが、特に、キリスト教は愛の宗教であるところからそのように理解される傾向が強かつた。「神は愛である」ということが安易に「愛は神である」とされ、本能的、自然的なものと愛という美名のもとに神格化される危険があつた。そこで彼は

「初めにモーセの律（おきて）ありて、後にキリストの恵みあり、いまだ律の厳格なる綱をもつておのれを縛りしことなき人は、キリストなる放免者の恩恵にあずかり得ざる人なり。」⁽³³⁾とか、「まず旧約の嚴重なる道德を教えずして直ちに新約の柔和なる恩恵を説く者は、自活の道を踏まざる子供に莫大の遺産を譲る愚父を学ぶ者なり」⁽³⁴⁾とか、「愛と恩恵とのみの道德は放縱に流れ易し、浄土門仏教の歴史が其事を示す」⁽³⁵⁾と言つて、義のない愛と恩恵のみの神という概念を排除した。

キリスト教の神が愛と恩恵の神であると同時に義と裁きの神であるという考えは、正統的なキリスト教の神の把握であるが、明治時代から今日迄、ヒューマニズム的・審美的傾向が強いとされる日本人には、余り深く理解されて来なかつたと言へる。そのような中で内村が日本人としては珍らしく、義なる神ということを深く考え得た背景には、彼の性格的なこともあるのであらうが、彼が徹底的に預言書を学んだということに由来するものであらう。彼は、エルウィン児童白痴院で働いていた一八八五年五月の事を記した日記の中で、改めて聖書に目を開かれたこと、特に旧約の預言書を全く新しい目で見ることが出来るようになり、「この時より二年間、余は聖書は預言書のほかはほとんど何も読まなかつた。余の宗教的思想の全体はそれによって変化せしめられた」と言い、その結果、彼は自分のキリスト教理解が福音書のキリスト教というよりもユダヤ教の一種であると言われたと書いているが、

彼のキリスト教、神理解には終生そのように見られる点があったと言えよう。そして正にその点にこそ、内村が内村たるゆえんがあったと言える。

日本人にとって今日最も理解困難なキリスト教の概念は、十字架による贖罪ということであろう。もちろん、十字架の福音ということは、パウロの時代にも「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの」であつたので、日本人にとってのみ理解困難という事柄でないが、日本人は十字架ということに、愛ということとは見る事が出来ても、裁きという点を看過しやすいと言える。そして実は、彼がキリスト教の神は「義にして愛である」と把握し得たこと、裁きと愛とが交又する点に贖罪信仰が成立すると捉え得た時に、日本の宗教にはないキリスト教の独自性、罪と罪からの救いということを理解し得たと言える。

五

キリスト教、特にプロテスタントと日本の仏教を比較して、まず気付かされる点は、浄土系仏教、特に浄土真宗との類似ということである。罪惡深重の凡夫としての自覚、他力救済の教え、阿弥陀仏への帰依という信仰などに両者の類似性が見られる。しかし厳密に両者を比較してみると、表面上の類似以上にまた相違点のあることもわかる。阿弥陀仏、神、共に人格的でありながらその人格の内容は異なっているし、他力救済ということも、その内

容となると、浄土真宗の救済がやはり仏教の根本である縁起の原理、四諦八正道を踏まえて成立しているのに比べて、キリスト教のそれが、罪からの救いとして、贖罪信仰によって成立しているというようになり相違していると言える。

内村がどこまで深く仏教、浄土系仏教を理解していたかは問題のあるところであるが、彼がキリスト教の贖罪信仰に日本の諸宗教、特にキリスト教に類似している浄土系仏教との相違点を見たことは、両者を比較研究する上での一つの視点を与えてくれていると思われる。そこで最後に、贖罪神と阿弥陀仏の相違を述べている箇所を引用して結論としたい。

「まことに三部経の阿弥陀仏と聖書のエホバ神とのおもなる相違点はここにあるのである。阿弥陀仏はすべて慈悲である。彼の手に、むちと剣と焼き尽くすの火とはない。彼はただひとえに弱き煩惱熾烈の衆生をあわれむ。彼はただ無限の慈悲をもって人を救わんとするのである、罪の処分の難問題のごときは、浄土門の仏教においては起こらないのである。されどもエホバの神はこれと異なる。彼は愛である（慈悲ではない）。しかして愛なるがゆえに聖である。しかして彼の聖愛は、不浄、不潔、不義、不虔に堪え得ないのである。しかして無条件にては罪をゆるしたまわないのである。『血を流すことあらざれば、ゆるさるることなし』（ヘブル書九・一二）とある。これ『罪の価は死なり』（ロマ書六・一二）とあるパウロの言と相對して考うべき言である。死は罪

(神に対する連続的反抗)と離るべからず。神は罪を適当に処分せずしてこれをゆるしたまわないのである。しかし、ゆるすことはできないのである。キリスト教の神は、罪をゆるすの神であると同時に、罪を憎み罪人を怒りたもう神である。この点において、彼と仏教(浄土門)の阿弥陀仏との間に天地の差があるのである。」

(1) 「武士道の台木にキリスト教を接いだもの、そのものは世界最善の産物であつて、これに、日本国のみならず全世界を救うの能力がある。」(内村鑑三信仰著作全集、教文館、二三巻、一九一頁)。「神が日本人より特別に求めたもう者は、武士の靈魂にキリストを宿らせまつりし者である」(同書、一九二頁)。

(2) 西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の五人。

(3) 畔上道雄「人間内村鑑三の探究」産報、六二頁。

(4) 「その女は信者でも何でもない。毎月三日月様になりますと、私のところへまいって、『ドウゾ旦那さま、お饅を六厘』と言う。『何に使うか』と言うと、だまっている。『何でもよいから』と言う。やると、豆腐を買って来まして、三日月様に豆腐を供える。後で聞いてみると、『旦那様のために三日月様に祈っておかぬと運が悪い』と申します。私は感謝して、いつでも六厘差し出します。」(内村鑑三信仰著作全集、一巻、二四六頁)。

(5) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」岩波文庫、二〇五頁。

(6) 同書、二二八頁。

(7) 石原兵永「身近に接した内村鑑三」山本書店、中巻、三一七頁。

(8) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」二〇八頁。

(9) 同書、二三二、二四頁。

(10) 一八七八年(明治二年、一七歳)六月二日、メソジスト監督派教会宣教師M・C・ハリスより受洗。

(11) 「求安録」(内村鑑三信仰著作全集、一巻所収)七五頁参照。

(12) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」三一頁。

(13) 「求安録」七一、七二頁。

(14) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」四五頁。

(15) 同書、四六頁。

(16) 「求安録」七二頁。

(17) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」一〇二頁。

(18) 「求安録」七五頁。

(19) 畔上道雄、前掲書、三九頁。

(20) 「求安録」七九頁。

(21) 一八八五年一月から七月迄、ペンシルバニア州立のエルウィン児童白痴院に勤務。

(22) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」一三一頁。

(23) 「求安録」八七、八八頁。

(24) 同書、九一頁。

(25) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」一三一頁。

(26) 同書、一五一頁。

(27) 同書、一六三頁。

(28) 「求安録」一三五頁。

(29) 「なんじ、みずから義たらんと努むるなかれ。そはあたかも小児が植木を鉢に植えて、毎日引き抜きつつ發育いかんを調査する類にして、とうていでき得べき事にあらず。なんじみずから聖くなると努めずしてただ十字架のイエスを仰げ。さらば平安なんじに臨まん」(内村鑑三聖書注解全集、一六巻、一七頁)とシリーズ総長より諭される。

(30) 「求安録」一六五頁。

(31) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」一七九頁。

(32) 「求安録」一一五頁参照。

(33) 同書、一六一頁。

(34) 同書、一六一頁。

(35) 内村鑑三聖書注解全集、一七卷、二〇四頁。

(36) 「余は如何にして基督信徒となりし乎」一五〇頁。

(37) 同書、一五〇、一五一頁。

(38) コリント人への第一の手紙、一章二三節。

(39) 内村鑑三信仰著作全集一二卷、五三頁。これは、愛弟子藤井武が内村の「聖書之研究」誌に、「單純なる福音」と題して、「恩恵と信仰、ロマ書を煮詰めたものは之に外ならない。寔に單純なる福音である。然り恩恵である、何となれば神は愛であるからである。信仰である、何となれば、恩恵はキリストに由て我等に臨むからである。我等はロマ書の精神の是れにて尽くるものなるを信ずる。……是に於て我等はかの所謂贖罪論に就て一言せねばならぬ。所謂贖罪論とは何である乎。其内容必ずしも一ならずと雖も、要するにキリストが我等の罪の代りに十字架に於て罰せられたといふことに於ては変らない。即ち我等が功なくして義とせらるるはキリスト既に我等の受くべき罪の報を悉く代て受け給ひしが故であるといふのであって、其根柢は神を正義の神即ち怒の神と見る旧約的思想に出づるのである。神は正義の神である、彼は最も罪を憎み給ふ、故に人の犯したる罪を罰することなくして無意味に之を赦し給ふ筈はない。然るにキリストの死に依て我等が功なくして義とせらるるは畢竟彼が自ら罪なきにも拘らず我等の罪を引き受けて神の前に我等の受くべき罰を代て受け給ひしに由るといふ寔に深遠ではあるが然しながら難かしき議論である。之決して單純なる福音ではない。神は罪を赦す愛の神である前に先ず之を罰する怒の神でなくてはならぬといふは、之果してイエス・キリストの十字架を以て顕はれたる新しき福音であらう乎。」(藤井武全集、岩波書店、第九卷、四〇四、四〇七、四〇八頁)と書いたのに対して、彼への反論

として「神の忿怒と贖罪」として書かれた文の一節である。後に藤井は贖罪信仰を受けるに到るが、この文には内村が如何に贖罪信仰を己れの中心思想としていたか、また、神が愛であると同時に正義であるという神観が日本の宗教の神観にはない独自のものであると見ていたかが伺われる。またそれと同時に藤井武に見られるように、日本人にとって如何に贖罪神という概念が受け入れがたいものであるかということが理解出来る。

(せきおか・かずしげ、比較宗教思想論、関西外国語大学助教授)